

## 良心への配慮

### I コリント 8 章 7～13 節

はじめに

先週は宗教改革を覚え召天者記念礼拝を行いました。ハイデルベルク信仰問答の 42 問の問いは「キリストがわたしたちのために死んでくださったのなら、どうしてわたしたちも死ななければならないのか」でした。その答えは「わたしたちの死は、自分の罪に対する償いなのではなく、むしろ罪との死別であり、永遠の命へに入口なのです」でした。このような死を無会えるためには「悔改め」が必要です。死があることで悔改めを忘れない。ここにも私たちが愛してやまない神のご配慮があるのだと考えました。

今日は I コリント 8 章に戻ります。7 章で結婚に関するコリント教会の質問に答えたパウロは、8 章から偶像礼拝の問題について、偶像に捧げた肉の問いに答えることになります。ここでも終わりの時を意識して「キリスト者の自由」、つまり罪から解放された者として、互いに仕え合う生き方が教えられています。1 節の「知識は人を高ぶらせ、愛は人を育てます」は大切なポイントです。

#### 1、 偶像に関する知識（7 節）

7 節「しかし、すべての人にこの知識があるわけではありません。ある人たちは、今まで偶像になじんできたため、偶像に献げられた肉として食べて、その弱い良心が汚されてしまいます。」

「この知識」とは、偶像に捧げた肉についての知識です。4 節にあるように「世の偶像の神は実際には存在せず、唯一の神以外には神は存在しない」という知識によれば、偶像に捧げた肉によって汚れるというような心配はしなくてよいのです。偶像礼拝はだめです。存在しないものを神としてはいけません。ただし、偶像に捧げても捧げなくても肉はただの肉です。

そのような知識によって、市場で売っている肉が偶像に捧げられたものかもしれないなどと心配しない信徒たちがコリントの教会にいました。彼らは、これは偶像に捧げた肉かもしれないと心配している弱い人たちに、何とか言ってやってください、というようなことをパウロに求めて来たようです。

これに対してパウロは 1 節で「知識は人を高ぶらせ、愛は人を育てます」と戒めました。あなたがたの知識は、あなた方を高ぶらせ、弱い人を見下して、

育てようとしていない、というのです。「愛は人を育てます」と訳された言葉はオイコドメオー、もともと建物を建てるという意味で、人の徳を建てるという意味で、パウロが好んで使うことばでした。

コリントの教会で、ある人たちは、今まで偶像礼拝に馴染んできていたため、ただの肉ではなく、偶像に献げられた肉としてそれを食べて、その弱い良心が汚されている、ということが起こっていました。

そこでパウロは言います。

## 2、他者の「良心」への配慮（8～10 節）

8 節「しかし、私たちが神の御前に立たせるのは食物ではありません。食べなくても損にならないし、食べても得になりません。」

8 章から 9 章にかけてのテーマである「偶像に献げた肉について」の基本的な態度がここに示されました。その上でパウロが気にするのは次のことです。

パウロが気にするのは弱い人のことです。今日の箇所では「弱い人」という言葉が 2 回、「弱い良心」「良心は弱い」という表現が 3 回も使われています。特に「良心」のことを問題にしていることに注目したいと思います。

「良心」は、ギリシヤ語でシュネイデーシスという言葉です。「共に」という意味の「スン」と、「知る」という意味の「エイドー」という言葉からなっていて、「共に知る」が語源的な意味です。ラテン語ではコンスキエンティア、これも「共に知る」という意味で、ここから英語のコンシエンスという言葉ができました。

「共に知る」とは、誰と共に知るのでしょうか。同志社大学には良心学研究センターという研究機関がありまして、2018 年に『良心学入門』という本を出版しました。この本でもコンシエンスの言葉の意味を説明して「共に知る」とは誰と共に知るのかということと 3 つあると言っています。まず、内なる他者（自己）と共に知る。次に外部の他者（第三者）と共に知る。そして神（超越的他者）と共に知る、です。適切な説明だと思います。内なる他者と共に知るというのは、自分の心の声に聴く、自分をしっかり持つことです。だれでもこのような良心をもっています。

日本国憲法 19 条は「思想及び良心の自由は、これを侵してはならない」としています。江戸幕府は長崎代官所で、長崎の住民に対して新年の絵踏みを 200 年間続けました。良心の侵犯の最たるものです。大日本帝国は植民地の朝鮮で神社参拝を強制しました。心の中でどう思っているとしても形だけ神社参拝をしろと強制したのですが、朱基徹牧師は良心の問題としてこれを受け入れず、殉

教しました。

こうしたことを考えると「弱い良心」とは、必ずしも「弱い」だけでなく「敏感」であるとか、いや逆に「強い」良心と言えるのではないと思えたりもします。

しかし、ここで語られているのは、やはり偶像に対する知識の不足により、過剰に恐れたり、その恐れに支配されたりしている「弱い良心の人」のことで、神社参拝に命を懸けて反対した朱基徹の良心は強かった。しかし、知識の不足から偶像に献げられた肉かもしれないと心配する良心は弱い、ということになろうかと思えます。この箇所は、そのように理解することができます。

そこでパウロは「食べなくても損にならないし、食べても得になりません。」ということについて、次のように注意し、勧めます。

9～10 節「ただ、あなたがたのこの権利が、弱い人たちのつまずきとならないように気をつけなさい。知識のあるあなたが偶像の宮で食事をしているのをだれかが見たら、その人はそれに後押しされて、その良心は弱いのに、偶像の神に献げた肉を食べるようにならないででしょうか。」

実にありそうな話ですね。「世の偶像の神は実際には存在せず、唯一の神以外には神は存在しない」という知識がないので、偶像の神への恐れから抜け出せない人たちがいるのです。彼らは、もうそんなことから自由になった人たちが、平気でどんな肉でも食べているのを見て、「それに後押しされて」、これは偶像に献げた肉だと思いながら、その肉を食べることによって、偶像礼拝から抜け出せない、ということが起こっていたようです。

「それに後押しされて」というところは、1 節の「愛は人を育てます」の「育てる」(オイコドメオー)という言葉が使われています。弱い人を育てるべきところが、弱い人を逆の方向に育てて、偶像礼拝に突き落としているというのです。これは大変なことです。弱い兄弟姉妹を躓かせ、滅ぼしていると言いうのです。

### 3、キリストにある兄弟を躓かせない (11～13 節)

11～12 節「つまり、その弱い人は、あなたの知識によって滅びることになります。この兄弟のためにも、キリストは死んでくださったのです。あなたがたはこのように兄弟たちに対して罪を犯し、彼らの弱い良心を傷つけるとき、キリストに対して罪を犯しているのです。」

聖書は教えます。もし私たちが、自分は知識を持っていると思うなら、高ぶってはいけません。むしろ、まだその知識を身に着けていない、弱い良心の人

が躓くことなく、知識を持つように育てられてゆくようにしなければなりません。

偶像に献げられた肉についての教えは、9章においてさらに詳しく教えられます。それを前に、パウロはこの問題における覚悟を述べます。

13節「ですから、食物が私の兄弟をつまずかせるのなら、兄弟をつまずかせないために、私は今後、決して肉を食べません。」

これから後、パウロは菜食主義者になったから、私たちも菜食主義者になるべきだ、というものではありません。これは誇張表現です。

ところで、偶像に供えた肉に類する問題は、日本の教会ではどのようなことがあるのでしょうか。

おわりに

先ほど神社のことにふれました。日本では神社は宗教ではなく単なる習俗であって日本人ならみな神社を参拝すべきだという考えがあります。80年前の日本は国家神道により、思想及び良心の自由は完全に侵害されていました。こうした問題に敏感になるのは良心が弱いのではなく、むしろ強いのです。これは混同しないようにしましょう。

ただ、お正月飾り、豆まき、ひな祭り、七夕、秋祭りなどについて、それをしなければならないことは全くありませんが、過度に心配し過ぎることもないともいます。特に季節の行事にまつわる食べ物に関しては、「食べなくても損にならないし、食べても得になりません」という原則でよろしいと思います。

最も大切なことは「知識は人を高ぶらせ、愛は人を育てます」というポイントです。「世の偶像の神は実際には存在せず、唯一の神以外には神は存在しない」という知識が未熟な人を躓かせるというようなことがないようにしなければなりません。

そうではなくオイコドメオー、育てて行く、そのような教会として歩んで参りましょう。